氏家町木造不動明王坐像について

平　川　晋　吾

図１．名称　木造・不動明王坐像
所在　氏家町養護園
像高　２９６cm

桧材、木造寄木造、木材片を組み合わせ体内の構造で全体の形を保っている。光明寺の銅造不動明王坐像の原型と考えられ、頭部、胸部、腹前等１３の部分に分離できるのは分鋳を行うためのものと思われる。

図２．名称　青銅造　不動明王坐像
所在　氏家町光明寺
像高　２９３cm

青銅造、分鋳、背面に銘文あり。火焔光背は、鋲止めされ右手に宝剣、左手に羂索を握る。江戸時代の分鋳の技術を伝える資料でもある。

氏家町にある光明寺境内の高い石壇上に、不動明王坐像があり、この像は丈六の金銅仏である。また氏家町の西側を流れる鬼怒川ぞいの川下にある氏家養護園には、木造の不動明王坐像があり、この二躰の仏像は形状がまったく同じである。(図　①、②)

光明寺の不動明王は、背面に刻まれた銘文により、光明寺十二世広栄上人の発願により、宝暦九年（1759）に、宇都宮鉄砲町に住む鋳物師、戸室卯兵衛71才）によって鋳造されたことがわかる。

金銅仏をつくるためには、金属（銅と錫の合金）を溶解し、鋳型に流し込んでかたちをつくる。鋳型をつくるためには、そのもとになる形（原型）が必要であり、光明寺の金銅仏をつくるためには、養護園の木造仏がその原型となったと考えられる。

鋳造でかたちをつくるには、先ず原型をもとにして鋳型を製作する。鋳型の材料は、砂（鋳物砂）に埴汁と呼ばれる粘土の水溶液を混ぜてもみこみ鋳物土とし、この鋳物土を使って原型をうつしとり鋳型にする。鋳物砂の原料は鬼怒川べりで、粘土は周辺の田畑で調達することができる。

例えば不動明王の頭部を鋳造するとすれば、はじめに原型を顔面側と後頭部側に分割し、それぞれに作業を進めることになる。図 ③㋑～㋭は顔面側について鋳型の製作を中心に鋳込の様子を示した。

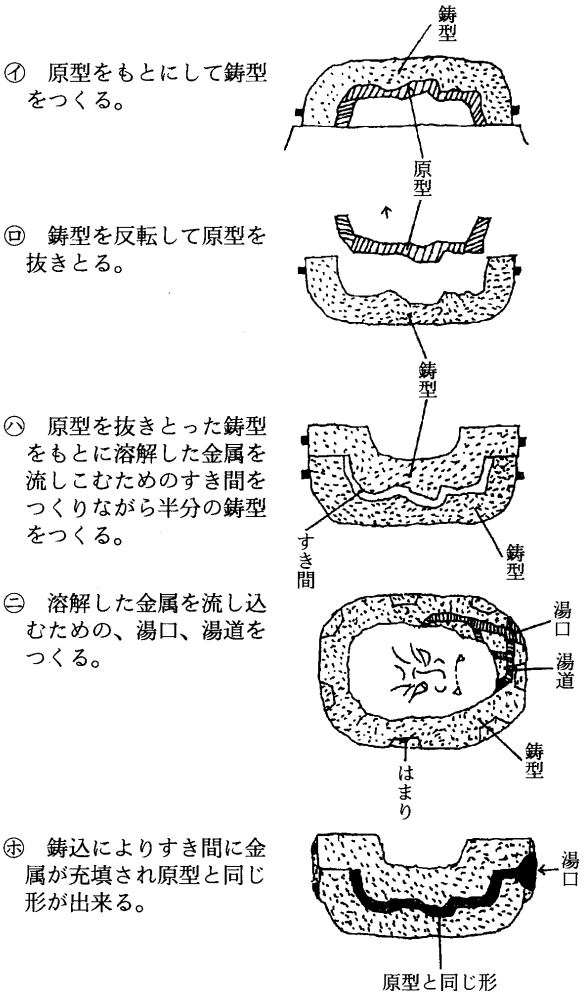

図3　頭部（顔面側）の鋳造

木造仏はこの様に鋳型を製作するために使用され、各部分ごとに鋳造されて金属におきかえられた。光明寺の金銅仏は、鋳造された各部分を鋳からくりや鋳かけの技法を用いて、また鋳鎹も多用しながら接合されて一躰となっている。なお全体の分割の状況は、図④に示す通り、13の部分に分割されている。

図4　原型の分割状況

養護園の木造仏は、頭部が黒漆で彩色されているが、他の部分は木造の生地のままである。全体に大小さまざまな木片をモザイク状に寄せて形をつくっている。そして接合部分は鉄の鎹（かすがい）で接合され、これらの接合部は光明寺の金銅仏の接合部と一致している。また木造物の修理中の写真を見ると、寄せ木でつくられた各部分がさらに細分化されている様子がわかる。例えば頭部では図⑤に示すように約16個に分割できる様になっている。このように分割をした理由は、ひとつに鋳造の原型として使用したとき、鋳型を製作した後、原型を抜きとる作業をするために原型をこのように分割することが出来れば、鋳型に損傷を与えずに抜きとることができる。もうひとつは、鋳型の製作に際して鋳物土は水分を含んでいるので、木造の原型をうつしとる時木材が水分を吸収することになり、木片の大きさによってはひずみを生ずることになるので、木片はできるだけ表面積が少ない方がよいことになる。しかし仮に木造仏が原型であったとすれば、各部分を組み立てる段階で、鋳型から原型を抜きとる順序は考えられており、木片表面には蝋等を塗って水分の吸収を防ぐなどさまざまな工夫がされていたと考えられる。

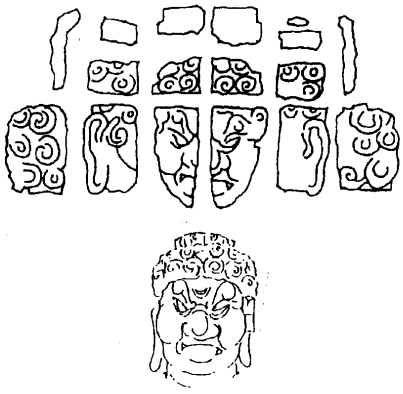

図5　木造仏頭部の分割状況

実際の作業は、鋳物土として使用する砂を得やすい鬼怒川の河川敷かそこに近いところに作業場をかまえて行われた。そして部分的にかたちになったものを光明寺へ運び、現在不動明王が安置されている高さまで土盛りをした場所で接合して一躰とし、その後基壇の形を整えながら余分な土をとり払った。

今から240年前にこの不動明王が完成した後、現在のように露座であったかどうかわからないが、もしそうであったとしても金銅仏の場合は表面に緑青をふいて変化をするぐらいである。

また原型と考えられる木造仏が、同じ年月を保存されてまつられてきた例は他に見られない。木造仏は光明寺不動明王の原型としてよりも、もうひとつの御不動様としてまつられてきたものであろうが、文化財としての価値も高く二躰とも大切に保存されなければならない。